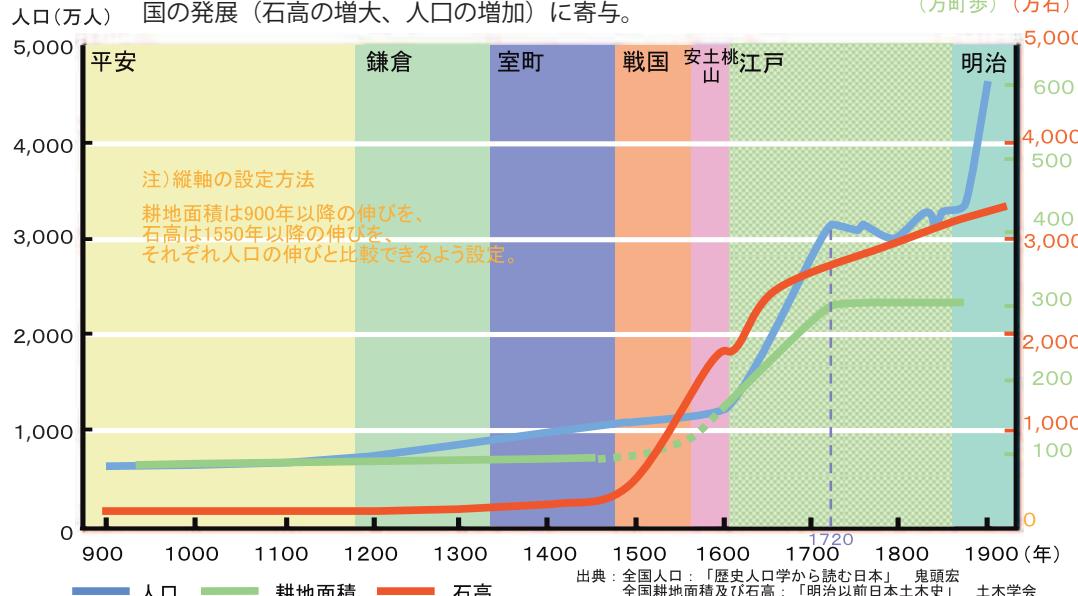


わが国の耕地面積の拡大と石高・人口の変化

国土への働きかけ（耕地面積の拡大）の積み重ねが
国（日本の発展（石高の増大、人口の増加）に寄与。



列島保全への課題

わが国、 国土への働きかけの歴史④

大河川改修と耕地開発

戦国時代の終わり頃から増え始めた耕作地は、江戸時代初期に爆発的に増え、100余年の間に耕地面積は3倍になりました。石高や人口も急増しました。1720年頃には、日本の総人口は幕末の人口と同じ約3000万人にまで達しました。江戸初期における大河川改修と干拓の成果である。16世紀から17世紀半ばに行われた利根川の東遷事業によ

つて、江戸は中小の洪水には襲われなくなった。江戸湾（東京湾）に流れ込んでいた利根川の流路を付け替え、銚子で太平洋に注ぐように改修されたのだ。

この河川改修は江戸の治水のほか舟運も目的であった。東北の物資を、房総半島を大迂回して江戸湾から江戸へ運ぶルートではなく、銚子で受け入れ利根川を北上させ、現在の江戸川の水系を使って江

戸に運ぶルートに変えた。

1654年（承応3年）にほぼ完成した利根川の東遷と対をなした、江戸にとっての重要事業が荒川の西遷だ。荒川の上流部で当時の入間川に付け替え、流路を西に迂回させた。1630年頃完成したこの事業は治水や新田開発、舟運の拡大に大きな効果を發揮した。私たちが今、大河川と認識するほとんどの河川は、この時期に何らかの手が

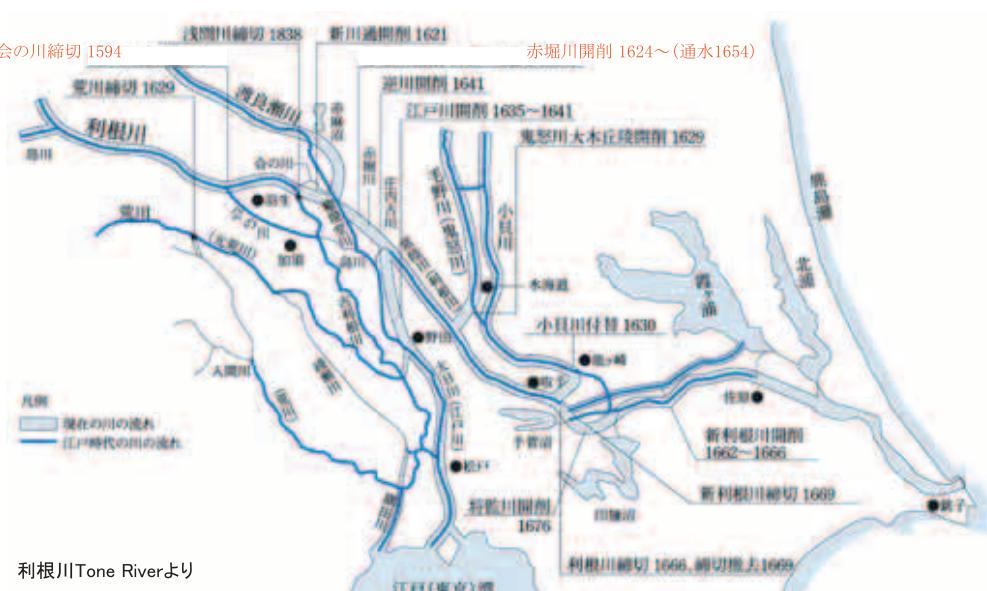
かえられ、新田開発などの事業が実施された。

当時改修された河川は、北上川・北上川・阿武隈川▽関東は久慈川・鬼怒川・渡良瀬川・江戸川・多摩川・鶴見川・酒匂川▽北陸は阿賀野川・信濃川・常願寺川▽中部は狩野川・富士川・安倍川・大井川・天竜川・矢作川・庄内川・揖斐川・木曽川▽近畿は淀川・大和川・宇治川・桂川・吉井川・芦田川・太田川▽四国は吉野川・重信川▽九州は遠賀川・筑後川・大野川。

上川・北上川・阿武隈川▽関東は久慈川・鬼怒川・渡良瀬川・江戸川・多摩川・鶴見川・酒匂川▽北陸は阿賀野川・信濃川・常願寺川▽中部は狩野川・富士川・安倍川・大井川・天竜川・矢作川・庄内川・揖斐川・木曽川▽近畿は淀川・大和川・宇治川・桂川・吉井川・芦田川・太田川▽四国は吉野川・重信川▽九州は遠賀川・筑後川・大野川。

矢部川・菊池川・緑川・白川・球磨川・川内川などである。ほとんどがわが国を代表する大河川である。大規模な事業がこの頃全国で行われた

利根川の東遷



利根川Tone Riverより

出典: 国土交通省利根川上流河川事務所ウェブサイト

徳川家康の江戸入府を契機に、江戸湾（現東京湾）から銚子へと流路を替える利根川東遷事業が開始文禄3年（1594年）から60年の歳月をかけて、承応3年（1654年）に完成する。概要

江戸時代初期の河川付け替えの物流は極めて活発になつた。それを可能にしたのは、各地に特徴的な産物が生ま

国土と日本人 災害大国の生き方 大石久和著



本著では日本の国土の地形的・社会的特徴や国土への働きかけの歴史が明らかにされています。日本人は今、何を考えるべきか、に気づくことの出来る好著。

発行: 中央公論新社

定価: 882円(本体840円)

北前船による物流の活発化

1640年頃、後に「北前船」と称される日本海沿岸を航海する西廻り航路が開発され、北海道の産物などが上方（大坂）や江戸に届くようになった。この航路は日本沿岸を伝うように巡り、安全に物資が輸送できるようになつて大きな富を各地にもたらした。山形の酒田や福井の敦賀などは北前船の交流で巨大な富を集積し、この富が明治時代に銀行を作ったり、鉄道を敷いたりする資金にも利用され、新しい時代を切り開く力ともなつた。

西廻り航路の開設でわが国の物流は極めて活発になつた。それを可能にしたのは、江戸時代初期の河川付け替えなどの工事が活発に行われた。それをして可能にしたのは、各地に特徴的な産物が生ま

れ、江戸や上方に持ち込まれるようになったのが大きい。

北からの産物と西国一円から集荷した物資を江戸に移送したのが菱垣廻船や樽廻船で、日本沿岸をぐるりと回る交易ルートが完成した結果、交易ルートが完成した結果、

かつて県民一人当たりの昆布の消費量が最も多かったのは沖縄県だった。しかし、沖縄県で昆布がとれた訳ではない。昆布がもたらされ、昆布が沖縄の脂の多い料理にうまくマッチしたから、といえる。

れ、江戸や上方に持ち込まれるようになったのが大きい。

北からの産物と西国一円から集荷の中核地・大坂が天下の台所として栄えるようになつた。中国（清）では、北海道などの産物、俵物三品（いりぬき物）なども荷揚げされた結果、関西に昆布の文化が根付ぎ、今日、京都にしんそばがあるのも北前船がにしんを運んできたからである。

かつて県民一人当たりの昆布の消費量が最も多かったのは沖縄県だった。しかし、沖縄県で昆布がとれた訳ではない。昆布がもたらされ、昆布が沖縄の脂の多い料理にうまくマッチしたから、といえる。

江戸時代、国土への大挑戦

から順に、東北は岩木川・最上川・北上川・阿武隈川▽関東は久慈川・鬼怒川・渡良瀬川・江戸川・多摩川・鶴見川・酒匂川▽北陸は阿賀野川・信濃川・常願寺川▽中部は狩野川・富士川・安倍川・大井川・天竜川・矢作川・庄内川・揖斐川・木曽川▽近畿は淀川・大和川・宇治川・桂川・吉井川・芦田川・太田川▽四国は吉野川・重信川▽九州は遠賀川・筑後川・大野川。

東は久慈川・鬼怒川・渡良瀬川・江戸川・多摩川・鶴見川・酒匂川▽北陸は阿賀野川・信濃川・常願寺川▽中部は狩野川・富士川・安倍川・大井川・天竜川・矢作川・庄内川・揖斐川・木曽川▽近畿は淀川・大和川・宇治川・桂川・吉井川・芦田川・太田川▽四国は吉野川・重信川▽九州は遠賀川・筑後川・大野川。

矢部川・菊池川・緑川・白川・球磨川・川内川などである。ほとんどがわが国を代表する大河川である。大規模な事業がこの頃全国で行われた

と呼ばれる多くが、江戸初期の経済成長期に生まれている。人形淨瑠璃の近松門左衛門や竹本義太夫、歌舞伎の市貝原益軒、天文学の安井算哲、浮世絵の菱川師宣、仏像彫刻の円空、数学の関孝和、本草学の渡川春海など、多彩な人物がこの時期に登場し、華やかに活躍した。

当時の日本人は、より安全でより使いやすい国土をつく

るため、果敢に挑戦を続けた。その治水の安全性向上や新たな耕地開発の上に、今の私たちが暮らしているのだ。